

多義語における語義の区切り方をめぐって

——位置形容詞「高い」「低い」「遠い」「近い」の場合——

丹 保 健 一

Classification of the Meanings of Polysemy.

Kenichi TANBO

キーワード；多義語、語義分割、位置形容詞、辞書、シソーラス、意味分類

要 旨

辞書（等）における多義語の語義分割の実態を、位置形容詞「高い」「低い」「遠い」「近い」を対象として調査・考察し、概念的意味に対する分割基準が、属性主体と属性の両者によっていること、また、それらの意識（感じ方）の違いが感受器官の別に大きく依存していることを示した。

目 次

- I. はじめに
 - I-1. 目 的
 - I-2. 対 象
 - I-3. 方 法
- II. これまでの研究
 - II-1. 語義の区切り方
 - II-2. 語義体系（シソーラス）
 - II-3. 意味分類の諸視点
- III. 辞書等に見られる語義分割の視点と基準
 - III-1. 「高い」の語義分割の視点と基準
 - III-2. 「低い」の語義分割の視点と基準
 - III-3. 「遠い」の語義分割の視点と基準
 - III-4. 「近い」の語義分割の視点と基準
 - III-5. 辞書等に見られる位置形容詞の語義分割の視点と基準
- IV. 問題点と今後の課題
- 注
- 引用・参考文献

I. はじめに

多義語研究の当面の課題としては、①多義語の認定（同音異議語との別）、②語義の区切り方（区分）、③語義の並べ方（配列）、④多義語の意味構造、⑤多義語の機能、⑥多義語の発生等が考えられる。（国広1986は、これらの内、④の研究が急がれるとしている。）

本稿は、これらの課題の②に当たる「語義の区切り方」を扱うものである。（注1）

I-1. 目的

本稿は、語義の区切り方の基準となっていると想定されるものを、辞書等によって調査、考察し、語義の分割がどのような基準（原則）によっているのかを見ようとするものである。

I-2. 対象語彙

分析対象は、本稿が試論的性格を持つことから、①現代日本語、②基本的な語、③単純な構造（単純な意味・格構造）を持つ語であることの三つの条件を満たすものとした。

このような条件を持つ語として、『日本語教育語彙資料(1)(2)—低学年初級』の形容詞語彙（『日本語教育のための基本語彙調査』において、a印が施されているもの）を選んだ。それらの語のすべて扱うことは紙幅の関係上不可能であるため、本稿では大野、浜西（1981）の中で「位置」に第一義があるもののみ限定した。（以下、「位置」に第一義をもつ形容詞を「位置形容詞」と呼ぶ。）本稿で扱う語彙は「高い」「低い」「遠い」「近い」の4語である。（注2）

I-3. 記述例採集辞書等

語義の区切り方の具体例は身近にある辞書で、主として現代語を扱っているものによった。具体的には次のような辞書の記述例を語義分割の例として取り上げることにした。

- (1) “KENKYUSHA'S NEW JAPANESE-ENGLISH DICTIONARY” Katsumata, eds (1954)
- (2) 『外国人のための基本語用例辞典』文化庁（1971）
- (3) 『新明解国語辞典』（第二版）金田一、他編（1974）
- (4) 『学研国語大辞典』金田一、池田 編（1978）
- (5) 『岩波国語辞典』（第三版）西尾、岩淵、水谷 編（1979）
- (6) 『例解新国語辞典』林、野元、南 編（1984）
- (7) 『新潮現代国語辞典』山田、築島、白藤、奥田 編（1985）
- (8) 『現代国語例解辞典』林 編（1985）
- (9) 『日本語大辞典』梅棹、金田一、他監修（1989）
- (10) 『基礎日本語』1、2、3 森田 良行（1977、1980、1984）
- (11) 『形容詞の意味用法の記述的研究』西尾 寅弥（1972）国立国語研究所
- (12) 『国語基本用例辞典』林、金子、他編（1986）
- (13) 『小学ことばのつかいかた辞典』林、金子、他編（1984）

以下、各々「和英」「外国」「新明」「学研」「岩波」「例解」「新潮」「現代」「日本」「基礎」「形容」「国語」「小学」と略称する

「形容」には、「低い」「遠い」「近い」についてのまとまった記述はなく、取り上げるのは「高い」の記述のみである。又、「国語」「小学」は、用例を中心とするもので項目に分けてい

るわけではない。説明のあるものを参考とする程度である。

I-4. 方法

上に挙げた現代語辞書(等)によって、語義の区切り方(語義立項)の実態を調査し、その後、語義を区切る際に働いていると思われる視点・基準を挙げ、それらの関連性・体系性を考察する。

このような方法をとるのは、これらの辞書等に見られる語義の区切り方には言語直観が反映されていると考えるからである。

II. これまでの研究

語義の区切り方について真正面から論じたものは少ない。ここでは意味を分類する(他から分ける)際の視点を探るという点において、シソーラス、意味分類といった研究をも見ておくことにしたい。

II-1. 語義の区切り方をめぐって

(1) 奥田(1967)

奥田は、奥田(1967)において、語の配列に言及する中で、「単語の語彙的な意味が実現する諸条件を一般化して、そのあり方を型にわけておきたいとおもうのである。」とし、「見る」を例に、「自由な意味(現実の対象その物に条件づけられているもの)」、「連語の構造に縛られた、意味・構造的に縛られた意味(特定の構造的なタイプの連語のなかでのみ実現している意味)」、「(文の中ではたす)機能に縛られた意味」、「(意味的には分割できない)慣用句のないいまわし」、「(慣用句的な組合せに見られる)、慣用句に縛られた意味」、「形態的に縛られた意味」の各々に区別する必要があるとし、さらに、「(社会的に承認を受けていない)単語の形象的な使用」と「慣用句に縛られた意味」との注意深い区別を指摘している。

II-2. シソーラス(語義の意味体系)の研究から

意味の遠近を考える上で参考となるのが、語義の体系とでも言うべきシソーラスであろう。

(1) 国立国語研究所(1984)

国立国語研究所(1984)では、次のような大枠が語彙分類の基本的基準となっている。

1. 抽象関係、
2. 人間活動の主体、
3. 人間活動—精神及び行為、
4. 人間活動の生産物—結果および用具、
5. 自然—自然物および自然現象、

(2) 大野、浜西(1985)

大野、浜西(1985)『類語国語辞典』に示されたシソーラスも見逃せないものである。形容詞を先ず<性状><性向>に大きく分け、更に各々を次のように分けている。

[<性状>](自然)

<位置><形状><数量><実質><刺激>
<時間><状態><価値><類型><程度>

[<性向>] (人事)

<性向><体格><容貌><見振り><態度>

<対人態度><性格><才能><境遇><心境>

また、名詞については、次のような大分類、中分類を提示している。

[大分類] — 「自然」「人事」「文化」

[中分類] — 「自然」「性状」「変動」「行動」「心情」

「人物」「性向」「社会」「学芸」「物品」

なお、100分類も示しているがここでは触れる必要はなからう。

(3) 荻野 (1987)

最近のものとしては、荻野 (1987) がある。名詞の分類ではあるが注目したい。次のように大別されている。

1 有意志体、2 具象体、3 活動、4 抽象概念、5 時、6 場所

又、荻野は、荻野 (1983) pp 4~61 において、現存のシソーラスは、次の情報の内、④の一部しか扱っていないと指摘している。

①格情報、②連語的情報 (選択制限)、③語義情報 (狭義の意味記述)、④概念情報 (階層構造における概念体系の位置)、⑤語の関係の情報 (同義、類義、上下、反対等)、⑥文体情報、⑦喚情の情報、⑧指示物の情報、⑨連想情報

ここに示された①~⑨の情報が辞書における語義分割にどのように働いているか興味深い。

II-3. 意味分類の諸視点

(1) リーチ. G (1974)

リーチ. G (1974) には7分類が見られる。

①概念的意味、②含蓄の意味、③文体的意味、④喚情の意味、⑤反映の意味、⑥連語の意味、⑦主題の意味

(2) 国広 (1982)

国広 (1982) では、次のような基準が挙げられている。

文法的特徴 (品詞の特徴、統語の特徴)、語義の特徴 (前提の特徴、本来の特徴)、含蓄の特徴 (①文体的特徴; 文語、口語、古語、新語、方言臭、年令等、②喚情の特徴; 軽蔑的ひびき、尊敬のひびき等、③文化的意味; 連想等)

(3) 池上 (1977)

池上 (1977) では、使用域の違いによって、①時間 (廃語、古語、新語等)、②地域 (方言、外来語)、③社会 (職業、卑語、女性語等、敬語) の視点を示している。

又、池上は、多義語の認定基準について、「共通の次元か。その次元のすべての可能性を尽くしているか。」(池上1977; 194 p)

(4) 鈴木 (1973)

鈴木は、鈴木 (1973) の中で、比較の基準に、①種の基準、②比率基準、③期待基準、④適格基準、⑤人形基準 (注; ①~④までは、エルンスト・ライズィの説) の5つがあることを指摘している。

(5) その他

この他、語義の区切り方の視点として考えられるものに、対義語の有無及び別、同義語の有

無及び別、類義語との関わり、言い換え語の有無及び別、漢字表記の有無及び別、等があろう。

なお、ここでは挙げなかったが形容詞の多義記述研究（国研1972等）や形容詞以外の語義分割（言語研究会1983『日本語文法・連語論（資料編）』、小泉1989『日本語基本語動詞の用例辞典』等）についても触れなければならないであろうが、これらについては別の機会を考えたい。

以上挙げてきた種々の考え方は具体的に辞書の語義分割を考察する上で多くの示唆を与えてくれるものと思われる。

Ⅲ. 辞書等に見られる語義分割の基準

さて、次に辞書等により、語義分割（語義立項）の具体的な記述例・基準を見ていくことにしよう。（辞書名の右の数字は語義分割数を示す。（ ）内の数は下位分類数を表す。なお、用例等は省いてある。）

Ⅲ-1. 「高い」

(1) 2分類；

「岩波」2(5)、

①基準とする面から上への距離が大きい。イ（ずっと）上方の位置にある。口上端までの隔たりが大きい。②他より著しい。イ地位・格式・能力等がすぐれている。口程度がはなはだしい。ハ買うのに多くの金がある値段だ。

「基礎」2、

①基準または話し手の視点・立場よりはるかに上のほうに位置する。②①のような位置に上端が来るような状態。

（分析）①は空間的、価値的な位置・レベル。「空高く昇る」「崖の上の高い所」「緯度の高い地域」「高い温度」「高い値段」「高い教養」「文化水準が高い」「気位が高い」「評判が高い」「……の誉れが高い」「高い声」「高い電圧」など、空間的、価値的な違いはあれ、いずれも段階、序列、程度などで位置が上であることを指す。②はその物の属性として上下に大きな落差を持っていること。「高い塔」「高い波」「高い山」「背が高い」「かかとの高い靴」「高い下駄」のように、垂直方向に伸びる物の性質としてとらえている。ただし、「高い鼻」のように隆起するのの落差が大きい場合、垂直方向でなくても「高い」で表すことがある。これは鼻や、前へ突き出た頬骨、額などによく用いる。

「岩波」は、属性主体の「空間的・具体的位置」か「抽象的位置」かによっており、「基礎」は、それ自体の位置か上端までの位置か、つまり、「視点・指示」の違いによっている。

(2) 4分類

「新明」4、

①最下底の位置から一定方向への隔たりや距離が・大きい（長い）。②（そのものの程度が）平均水準より上の状態だ。③耳に・良く（強く）聞こえてくる様子だ。④その物の実際の価値に比べて、不釣り合ほど多くの金がある値段だ。

「例解」4、

①地面や底面など、規準になる面よりも、上の方にある。また、基準となる面とのへだたりが大きい。②ほかのものごとよりも、等級や程度、価値などが上である。③音や声の振動数が多い。また、耳によく聞こえる。④たいへんな金額だ。

「外国」 4、

①上から下までの長さが長いようす。上へ延びているようす。②身分・能力・程度などがすぐれているようす。③声や音が大きいようす。④買うのに多くの金がいるようす。

4分類は、先に挙げた2大別の前者（「岩波」）の「抽象的位置」から「刺激；音、声」と「価値・評価」を分離している。

(3) 5分類

「和英」 5、

①〔場所・高さの〕、②〔地位・希望などの〕、③〔音声の〕、④〔高価の〕、⑤〔広く知られている〕

5分類は、4分類の③声、音について（「刺激」）から⑤「広く知られている。」を独立させている。

(4) 7分類

「日本」 7、

①下端から上端までのへだたりが大きい。②地位・身分が上位である。③能力・程度などがすぐれている。④数値が大きい。⑤音の振動数が多い。⑥金額が大きい。⑦広く知られている。

7分類は、5分類の②「(そのものの程度が) 平均水準より上の状態だ。」を、(ア)「地位・身分」(イ)「能力・程度」(ウ)「数値」の3つの観点からに分けている。

(5) 8分類

「現代」 8、

①空間的に上の方にある。②音や声が大きい。また、音声の振動が大きい。高音である。③広く知れわたっている。④身分や地位が上位にある。⑤品位、理想、力量、機能などがすぐれている。⑥高慢である。多く「お高い」で用いる。⑦金のかかるさまである。⑧計測器の示す目盛りが上の方であって、度合が強い方である。

「現代」では、7分類の①を分けることをせず、⑧「計測器の示す目盛りが上の方であって、度合が強い方である。」を分離している。

先の7分類と大きく異なる点としては、慣用句表現である「高慢である。多く「お高い」で用いる。」が加わっていることが挙げられる。

(6) 9分類

「新潮」 9、

①上方への長さが大きい。(鼻などについて) 顔面から前方への突き出しが鋭い。②位置が上方へ大きく隔たっている。③身分・地位が上である。高貴である。尊い。④品格・能力がすぐれている。⑤程度がはなはだしい。また、数値が大きい。⑥(値段について) 多くの金がいる。高価である。⑦有名である。名高い。高名である。⑧音声が大きくて強い。⑨(多く「お」を上につけて) えらぶっている。

「新潮」は、7分類の①下端から上端までのへだたりが大きい。を、①「上方への長さが大きい。(鼻などについて) 顔面から前方への突き出しが鋭い。」②位置が上方へ大きく隔たっている。」に分けている。

(7) 11分類

「学研」 11、

① (ものの位置が) 上の方であって、基準の面 (地面・海面・底面など) からのへだたりが大きい。② (ものの) 下端から上端までの長さが大きい。たけが長い。③身分・地位が他より上にある。④能力が他よりすぐれている。⑤品位・品格がりっぱである。⑥一定の水準よりまさっている。⑦程度・勢いなどがはげしい。また、数値が大きい。⑧声・音が耳に大きく聞こえる。⑨よく聞こえている。有名である。⑩買うのに多額の金銭がかかる。量や質に比べて値段が多い。⑪えらぶっている。[多く「おーい」の形で使う]

11分類は、4分類の②「(そのものの程度が) 平均水準より上の状態だ。」を9分類よりさらに細かく次のように分けている点で異なっている。

(ア)「身分・地位が他より上にある。」(イ)「能力が他よりすぐれている。」(ウ)「品位・品格がりっぱである。」(エ)「一定の水準よりまさっている。」(オ)「程度・勢いなどがはげしい。また、数値が大きい。」

この外、「鼻が高い」「目が高い」について、触れている辞書(「小学」)もある。

(8) 参考として「国語」の解説を挙げておこう。

「国語」

「高い木」「波が高い」のように〔下から上までの長さやきよりが大きい〕とか、「高いてんじょう」「身分が高い」「高いねだん」「気温が高い」「高い評価」「高い文明」「気位が高い」などのように〔位置、身分、地位、等級、数量、評価やねうち、気品や気位などが上である〕というのが基本の意味です。

「鼻が高い」には、実際に鼻が高い意味と、「みんなにほめられて鼻が高い」のように、得意である、自まんであるという意味とがあります。「声が高い」は、音や声が大きい、または、音や声の調子が高いという意味、「見る目が高い」「見識が高い」などは、能力や考えがすぐれているという意味。「評判が高い」「名高い」は、評判や名前が広く世間に知られているという意味です。

(9) 次に「形容」を見て行くことにしよう。各々の分類(大分類、中分類)の意味について述べている部分を挙げておこう。

[0]

[0]においては、「たかい」は空間的の量を表したが、…

[001]

「ものの垂直方向への延長が大きい」という基本的な意味をもっている。—中略—「たかいえんびつ」とは言わないように、上の規定だけでは十分とはいえない点がある。

[002]

ここでは、「たかい」があるものの存在している位置について表す用法をみよう。

[01]

水平面以外のものが基準となって、「あるものの表面から外に飛び出しているものの長さが大きい」という意味に使われることがある。

[1]

[0]においては、「たかい」は空間的の量を表したが、その基本的な意味をふまえて比喩的に、あるいは慣用化された意味として、ものごとの質がすぐれていること、価値が高いことを表すことが多くみられる。

- [1]はものごとが質・価値的にすぐれていることを表すものであった。
- [2] 価値的な要素が失われて、たんに量的・程度的にいちじるしいことを表すことがある。
- [21]
測定できるような尺度的な資質などに関して、尺度上の目盛りがかなり上のほうであることを表すことがある。
- [22]
音や声について「たかい」が用いられるばあいがある。
- [23]
「うわさ」「評判」「ほまれ」「名」「聞こえ」「悪名」のような語と「たかい」が結びついて、広く知られている、名高い等の意味をあらわすことがある。
- [24]
もののおいについて、「たかい」が用いられ、においが著しく、めだって感じられることを表す。
- [25]
量・程度がいちじるしいとまとめ得るような「たかい」の用法は[21]～[24]以外にもまだあるように思われる。ここでは、用例があって気付いたものを一だけあげる。—中略—～意気たかく、～—中略—しかし「元気が高い」*「気力が高い」*「闘士が高い」*(A)ファイトが高い」は作らず、やや慣用句的である。
- [3]
「それが売り買いされる時の金額が大きい」という意味。
- 10) 上の「形容」の最も大きな分け方（これを形容・大分類と呼ぶことにする）の基準は次のように示すことが出来よう。
- [0] 空間的位置、(具体物に対する) 空間認識 [空間的位置]
[1] 質・価値の大きさ、(抽象物に対する) 評価認識 [質的評価]
[2] 量・程度の大きさ、(抽象物に対する) 程度認識 [数量・程度]
[3] 価格の大きさ、(物事に対する) 交換価値的認識 [価格]
- 11) 大分類の直接下位分類（これを形容・中分類と呼ぶことにする）の基準を見ておこう。「形容」によってそれらを示すと次のようになろう。
- [0]は、1、(基準が水平面で) 垂直方向への延長・量的な性格[001]か
2、(基準が水平面で) 存在位置[002]か
3、水平面以外が基準[01]か
- [1]は、中分類されていない。
- [2]は、1、測定できるものの尺度上の位置[21]か
2、音・声について[22]か
3、抽象的音・声(名声)[23]か
4、匂いについて[24]か
5、精神(活動)等(慣用句が多い)[25]か
- [3]は、中分類されていない。
- 12) 「形容」では、中分類をさらに様々の観点から分けている。(これを形容・小分類と呼ぶことにする) 具体的な記述を示すことは紙幅の関係から割愛するが、注目される点を指摘してお

こう。

[001]を分ける際の基準として、少なくとも(a)固定的か否か、自立的か否か、全体的な否か、(b)基準が考えやすいものか基準が考えにくいものか、(c)主体が、固体か非固体か、(d)人間、(e)人間以外の転用、がある。

[002]の下位分類には、「連用修飾語」の用法によって区分している点が注目される。

[01]の下位分類には、慣用句的表現（「鼻が高い」）、漢字の遣い分け（「隆い」）によるものが注目される。

[1]では、主体が人間に関するものをさらに、(a)社会的位置、(b)精神活動の目標値、(c)能力、(d)精神的価値、に分けている。

[21]の下位分類の大枠は、主体が、測定しやすいものか否か、目盛りそのものが「～が高い」の「～」にくるか否かによっているようである。

[22]は、(a)周波数が多い、(b)振幅が大きい、の何れかに分けられている。なお、「抽象化して、世論が強いの意味」を含めているが、これは、[23]に含めるべきであろう。

[23][24][25][3]には特別な下位分類は見られない。

なお、[21][22]には「低い」と対立があり、[23][24][25]には「低い」との対立がないことを指摘している。

(13)「形容」にみられる「高い」の語義分類基準について小分類をも含めてまとめると次のように示すことができよう。(優位性を意識したものではない。) < >内の基準はそれによって他を分けていると思われる意味特徴を表わす。

[0] 空間的位置が大きい(基本的意味) <空間・具体性>

—[001]基準が水平面で量的な延長・長さ

—<基準の面から考えやすいもの><位置固定><固体><非固体>
 <基準の面から考えにくいもの><人間><人間以外の転用>等

—[002]基準が水平面で存在位置

—<ものの位置><連用修飾句の形>

—[01]基準が水平面以外

—<具体的量的延長><慣用句的表現><表記上の別>

[1] 質・価値的に優れている<評価>

—<空間的表象の有るもの><空間的表象の無いもの><対人的優越性><実現目標価値><能力><内面的、精神的価値>

[2] 量・程度的にいちじるしい<程度>

—[21]測定できる性質

—<計量されやすいもの><計量されにくいもの>

—[22]声・音に

—<周波数><振幅>

—[23]広く知られている

—[24]におい

—[25]精神活動(慣用句的表現が多い)

[3] 価格(的に大きい) <価格>

—<不当に高いというニュアンスのあるもの>

(14) 以上、「高い」についていくつかの辞書（等）や「形容」などによって語義の分け方の基準を見てきた。そこには様々な基準が見られ、そして、明らかに次元の異なるものもみられた。「高い」の語義を区切っていると思われる基準を羅列すると次のようになろう。（優位性について考慮したものではない。）

- ①具体、有形（空間）、②抽象、無形（質・量）
- ③刺激（音、声等）
- ④価格・値段
- ⑤慣用句的表現
- ⑥視点・指示の別
- ⑦人の属性（イ身分・地位、ロ能力、ハ品位・品格）、⑧事柄の属性（数量、程度）
- ⑨評判・名声
- ⑩価値・評価
- ⑪構文的職能の別
- ⑫表記の別

(13) 喚情的意味？)

これらの内、⑤、⑥、⑩、⑫の基準は次元を異にするものと思われる。

(15) これまで見てきた中で、大きく次元の異なる基準には次ようなものがある。

- A、概念的意味
- B、垂直方向の延長あるいは、位置によるもの、基準位置の別、(指示の別)
- C、構文的職能の別によるもの。
- D、慣用句用法
- E、表記の相違
- F、喚情的ニュアンスの有無（評価？）

これらのうちで、語義分割において最も大きな働きをしているのがAの概念的意味である。

奥田（1967）の「自由な意味」であり、リーチ（1974）の「概念的意味」であり、国広（1982）の「(語義的特徴の内の) 本来的特徴」である。

(16) 「たかい」の概念的意味の分割基準の主たるものは次のようにまとめることができよう。

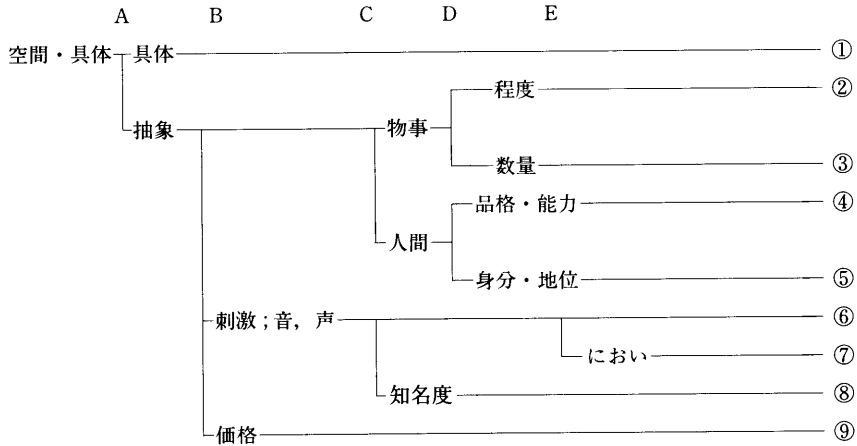
- 1、空間的・具体的位置か、2、抽象的位置か、
- 3、刺激（音、声）か
- 4、価格か
- 5、2の下位分類
 - 2-1、人間に関して
 - 2-2、物・事に関して
- 6、2-1の下位分類
 - 2-1-1、個人的か
 - 2-1-2、社会的か
- 7、2-2の下位分類
 - 2-2-1、程度
 - 2-2-1、数・量
- 8、3の下位分類

3-1、音、声

3-2、におい

図式化しておこう。

辞書等に見られる概念的意味分割基準体系



(17) このように図式化すると、体系として矛盾していることに気付くであろう。属性主体についてのものか、属性そのものについてのものかといった疑問や、「物事」の内の「物」は抽象と言えるのかといった点などである。このような矛盾については後に述べることにしたい。

(18) 語義の分割基準としては、語構成要素、品詞、語用論的意味（俗語、位相語、方言、外来語、待遇表現、文体、詩語、古語、文化的意味）、等が考えられるが、これまで見てきた範囲では「高い」には、そのような基準による分け方は見られなかった。

Ⅲ-2. 「低い」の辞書等の語義分割の視点・基準

次に「低い」について見ておこう。

(1) 2分類

「岩波」2(5)

①規準とする面から上への距離が小さい。イ、下の方の位置にある。ロ、上端までの隔たりが小さい。②他より著しくはなく、目立たない。イ、地位・格式、能力等が劣っている。ロ、程度がはなはだしくない。ハ、声・音の振動数が少ない。

「新明」2、

①最下位の位置から一定方向への隔たりや距離が・小さい（短い）。②〔そのものの程度が〕平均水準より下の状態だ。

「基礎」2、

①そのものの位置が規準からあまり上がっていないこと。また、話し手の視点・立場が標準よりはるか下の方に位置すること。②①のような位置に上端がくるような状態。

「低い」を2つに分けているものには、上に挙げたように「岩波」「新明」「基礎」がある。これらの内、「岩波」「新明」の分け方は、①空間的・具体的位置か、②質的・抽象的位置かによっていえる。また、「基礎」は、視点の差、つまり、①そのものの位置か、②上端

までの位置かによって分けている。興味深い相違をみせている。

(2) 3分類

「例解」3、

- ①ある規準になる面よりも、下の方である。また、いちばん下から上までの距離が小さい。
- ②ほかのものごとよりも、等級や値段などが下である。③声や音の振動数がすくない。また、耳によく聞こえない。

「和英」3、

- ①高さが、身長が、緯度が、②(身分が)卑しい。③音声が
- 3つに分けているものには上に挙げたように「例解」「和英」がある。3分類では、①空間的(具体的)な位置、②質的(抽象的)な位置に加え、③刺激(声、音)を分けている。

(3) 4分類

「日本」4、

- ①上端と下端との隔たりが少ない。②地位・身分が卑しい。③程度・数量が甚だしくない。
- ④声や音の振動数が少ない。

4分類では、3分類の内の②「質的位置」をさらに②「人間に関するもの(地位、身分)」と③「それ以外(物事)に関するもの(程度、数量)」の二つに分けている。

(4) 5分類

「学研」5、

- ①高さの程度が少ない。②〔音響学で〕音の振動数が少ない。〔一般の用法で〕声小さく、遠くまで聞こえない。③身分・地位・品等がいやしい。④能力が劣っている。⑤一般に程度が小さい。

「現代」5、

- ①下の方にある。また、下からの長さ、隔たりが小さい。②序列や等級などが下位である。
- ③値打ちが小さい。④程度や数量が水準より下である。⑤音声の振動がすくない。

5分類には、「学研」「現代」の両者があるが、基準に相違が見られる。「学研」は、①空間的位置、②音・声の高さ、大きさ、③社会的地位、④能力、⑤程度、「現代」は、①空間的位置、②社会的地位、③価値、④程度・数量、⑤音・声の高さに各々分けている。つまり、人間の属性を社会的(集团的)位置と個人的(個有の)能力に分けるのが「学研」であり、価値を取り出しているのが「現代」である。

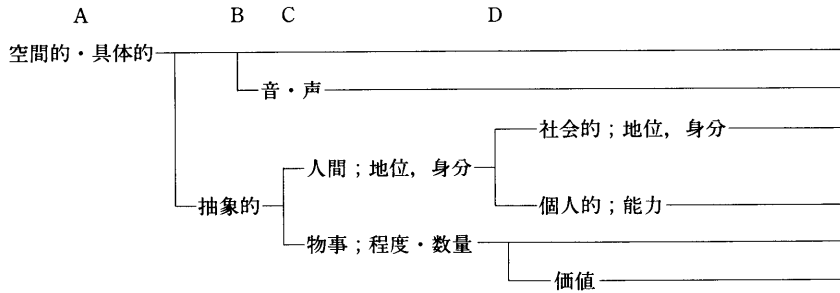
「国語」は用例の羅列のみで解説もない。

(5) 「低い」についてその語義の区切り方の基準を大きなものから順に、取り出しその上位について整理すると、次のようになろう。

- 1、空間的・具体的か
- 2、質的・抽象的か
- (1、2に指示(視点)の別が入ることもある。)
- 3、刺激(音・声)の分離
- 4、人間に関する属性か、5、物事に関する属性か
- 6、4の下位分類
 - 4-1、社会的
 - 4-1、個人的

7、5 「物事に関する属性」から価値の分離

(6) これらを考慮して、まとめると次のようになろう。



Ⅲ-3. 「遠い」の辞書等の語義分割の視点・基準

「遠い」についての語義の区切り方はどうであろうか。

(1) 1分類

「岩波」1(6)

①大きく離れた位置にある。イ、距離が長い。ロ、時間の隔たりが大きい。ハ、血縁が密接でない。ニ、親しくない。疎遠だ。関係が薄い。ホ、性質・内容が似もつかない。ヘ、ぼんやりしている。にぶい。

「新明」1、

①その物事との間の隔たりがおおきくて、じかに見聞きしたり直接に関係をたどったりすることが出来ない状態だ。

「岩波」は下位分類では6つに分類している。なお、「高い」では、「岩波」では2つに、「新明」では4つに分けている。

(2) 3分類

「例解」3、

①そこまでの距離が長い。また、そこまでいくのに時間がとてもかかりそうだ。②あまりつきあいがいい。あまり、したしくない。③よく聞こえない。

「基礎」3、

①地理的隔たりが大きい。②時間的隔たりが大きい。③関係・相似性の隔たりが大きい。

「例解」は聴力（音、声）を項目としているのに対し、「基礎」では地理的（空間的）隔たりと期間（時間的）的隔たりとを分けて立項している。この内、聴力としての立項は慣用句的表現としての性格を持つものと言える。

共通しているのは、関係を挙げている点である。ただ、「例解」では、人間についての関係としているのに対し「基礎」では限定していない点で異なる。

(3) 4分類

「日本」4、

①距離が離れている。②時間がたっている。③関係が薄い。親しくない。④意識や感覚がぼんやりしている。

「和英」4、

①距離が離れている。②時間のへだたりが大きい。③関係がうすい。④感覚がにぶる。

4分類はほぼ一致している。「空間的隔たり」「時間的隔たり」「関係の隔たり」「刺激・感受・精神活動能力」の4分類である。

(4) 5分類

「学研」5(11)

①空間的・時間的にへだたりが大きい。イ、空間的に大きく離れている。ロ、時間的に隔たっている。②抽象的にへだたりが大きい。関係がうすい。イ、血縁関係がうすい。ロ、交渉・交際が少ない。ハ、親しみが薄い。ニ、見ること・することが少ない。ホ、あまり持ち合わせていない。ヘ、共通点が見出しにくい。似ていない。ちがっている。③よく聞こえない。④<目がー・い>老眼である。とおめである。⑤<気がー・くなる>意識を失う。比喩的に、意識を失うほど心を動かされる意でも用いる。

「現代」5、

①空間、距離の隔たりが大きい。②時間の隔たりが大きい。③関連や関係が浅い。つながりが浅い。④物事の性質・内容、程度などが似ていない。大差がある。⑤老眼である。遠視である。

「視力」が加わることや、4分類の「関係」に関する基準を「関連性、関係」と「類似性」の二つに分けていることなどが4分類に見られなかったものである。

(5) 参考として、「国語」の説明の部分を挙げておこう。

「国語」

[場所と場所との間がずっと離れている、] [物と物とのへだたりが大きいこと] をいうのが基本で、「遠い昔」「遠い将来」などは時間のうえでのへだたりが大きいことをいった例。

実際の距離や時間についていうだけではなく、「遠い存在になる」「遠い親類」のように、[気持ちの上での距離] や [ものごと関係] についていうばあいもある。また、[あしが遠くなる] は、行き来が少なくなることを、「電話が遠い」は、電話の声小さくて聞き取りにくいことを、それぞれへだたりの大きさにたとえて表現した例。「耳が遠い」も、同様に、耳が良く聞こえないことをいう。「気が遠くなる」は、意識がうすれて、ぼうっとした状態になることを、現実とのへだたりが大きくなるように感じた言い方。

(6) 「遠い」の語義分割の大きな基準としては、まず、①空間・具体、②時間・抽象、③関係、④人間、(慣用句表現) の4つが考えられる。①②が1つになったり、④が考慮されない場合も見られるものの、これらの4つを大きな基準と考えてよいだろう。これらの基準以外には、③の「関係」をさらに人間に関する事柄か否かによって分けたり、人間に関する事柄をさらに分ける場合などがある。その外、慣用句的表現を分けることも見られる。

1、空間的隔たりか、2、時間的隔たりか

3、関係の隔たり

4、人間の感受力の大小

5、3の下位分類

3-1、人間に関する属性 (→親疎、血縁)

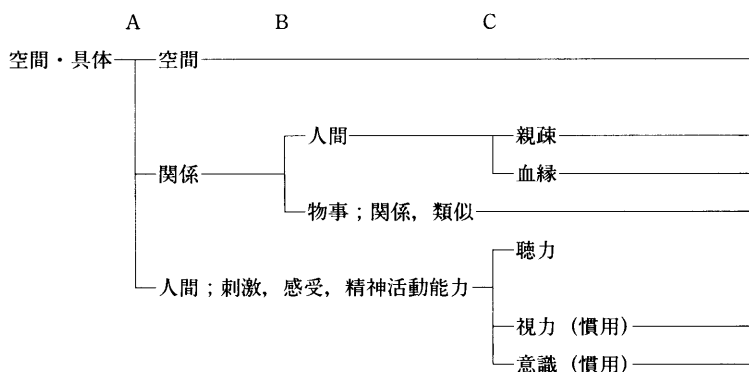
3-2、物事に関する属性→ (関連性、類似性)

6、4の下位分類

4-1、感知 (→聴力、視力；慣用句表現)

4-2、情意→ (意識；慣用句表現)

分かりやすく図式化しておこう。



Ⅲ-4. 「近い」の辞書等の語義分割の視点・基準

(1) 2分類

「岩波」2(6)、

①あまり離れていない。イ、距離が短い。ロ、時間の隔たりが少ない。ハ、血縁が密接である。ニ、親しい。近しい。ホ、性質・内容が似ている。②「目が—」近眼だ。

慣用句を分離し、その後下位分類として空間、時間、人間関係、事物関係等に分けている。慣用表現を別次元のものとして優先させる考え方を伺うことができる。

(2) 3分類

「新明」3、

①その物事との間の隔たりが小さい。②直接血縁関係がたどれる間柄だ。③親しくつきあっている。

「例解」3、

①空間的・時間的な隔たりが小さい。②内容や数量などが、あるものと比べて、それにちょっとおよばないが、ほぼ同じくらいである。③関係が深い。

「基礎」3、

①地理的隔たり。②時間的隔たり。③関係・相似性の隔たり。

3分類には、様々な区切り方が見られる。空間と時間の分割、人間関係と物・事の関係の分割などである。

(3) 4分類

「学研」4(6)

①〔距離・時間の〕へだたりが少ない。②抽象的にへだたりが小さい。関係がこい。イ、血縁関係が密接である。ロ、親しい。近しい。ハ、交渉・交際が多い。③〔性質・形状・内容・状態が〕似ている。④数量がそれよりやや少ない程度である。それに満たないがほぼそれくらいである。

「和英」4、

①時間的に、②距離上、③関係が、④ほとんど…、

4分類では、3分類の③「関係、相似性の隔たり」から、「数量の隔たり」が分けられている。

(4) 6分類

「現代」6、

①空間、距離の隔たりが少ない。②時間の隔たりが少ない。③ある数値に届こうとしている。④（「目が近い」の形で）近視である。⑤親密である。⑥物事の性状、内容がにている。

「日本」6、

①距離が短い。②時間がそうたっていない。③関係が深い。④あともう少しで…だ。⑤性質などが似ている。⑥近視だ。

6分類では、4分類で「関係の隔たり」としていた項目をさらに人間関係と物事の関係とに分け、慣用句表現である「近視である」を項目として立てている。なお、「視力」（慣用句用法）についての立項は2分類の「岩波」にも見られたものである。

(5) 参考として「国語」の説明を挙げておくことにする。

「国語」

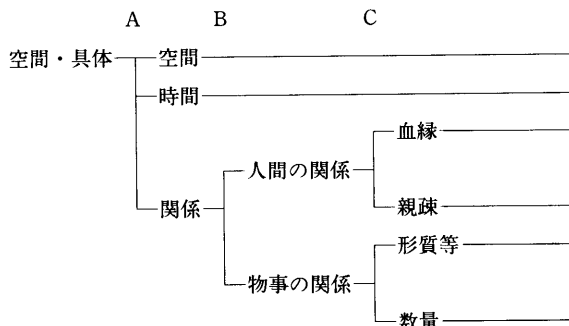
「駅に近い」「近い将来」「完成が近い」のように、距離や時間のへだたりが小さいことをいうのが基本で、「近い親戚」「首相に近い議員」などは、関係や間柄が親しいことをいった例。そのほか、「七十人近い人たち」「気温は三十度に近い」「正解に近い」「クリの味に近い」なども、数量・内容や感じが似ていることをいった例。このように「近い」は〔全体としてもものごとのへだたりが小さい、またそのように感じられる〕ことをいうのに広く用いる。「不可能に近い」はほとんど不可能であるということ。

近視であることを「目が近い」手洗いに立つ間隔が短いことを「トイレが近い」のよう
にいう例もある。

(6) 「近い」について、辞書に見られる基準を整理すると次のように示すことが出来よう。

- 1、空間的・具体的隔たり
- 2、時間的隔たり
- 3、関係的隔たり
- 4、刺激（慣用句表現）
- 5、3の下位分類
 - 3-1、人間関係
 - 3-2、物・事の関係

概念的意味について図式化しておこう。



Ⅳ. 辞書に見られる位置形容詞の語義分割基準

これまで位置形容詞「高い」「低い」「遠い」「近い」の辞書等に見られる語義の区切り方の基準を探ってきた。その中で、いくつかの基準と思われるものに出会った。それらを総合的に見ておこう。

(1) 位置形容詞の語義分割基準として次のようなものが見られた。(優位性については無視している。)

- ①具体 (空間)、②抽象 (質・量)
- ③刺激；音、声；聴覚
- ④値段・価格
- ⑤慣用句的表現
- ⑥視点・指示の別
- ⑦人の属性 (イ身分・地位、ロ能力、ハ品位・品格)、⑧物事の属性 (数量、程度)
- ⑨評判・名声
- ⑩価値
- ⑪構文的職能の別
- ⑫表記の別
- ⑬時間
- ⑭個人的、個有 (属性) か ⑮社会的、集合 (的属性) か
- ⑯刺激；匂い；嗅覚
- ⑰事
- ⑱関係
- ⑲精神活動

(2) 上に示した様々な基準は、少なくとも次の様な異なる次元に分けることができよう。

- A、概念的意味の別 (①②③④⑦⑧⑨⑬⑭⑮⑯⑱)
- B、視点・指示そのものの別 (⑥)
- C、慣用句的表現 (⑤)
- D、表記の別 (⑫)
- E、構文的職能の別 (⑪)
- F、喚情的意味の別 (プラスイメージ) ? (⑨?⑩?)

これらの次元を異にする諸基準の優位性は語の語彙的性格や辞書の性格の違いなどによって必ずしも決定的なこととは言えない。又、これらの両者にまたがっていると思われる立項もある。しかし、一般的に言えば、A～Fの基準が明確な場合、これらは何れかの段階で分けられる傾向があると言えよう。

これらの基準には入れなかった格支配・格体制は語義の反映とでもいうべき性格を持つものであり、辞書の記述としては重要な位置を占めるのである。しかし、次元としては、概念的意味の範疇に入るものである。

次元を別にすると考えられるものに、上に挙げた外、語構成要素の別、位相の別 (俗語的表現、方言的表現、等) 等が考えられるが、位置形容詞ではそれらが分類の主要な基準となっていると考えられるものはなかった。

(3) 辞書の記述には、「① (ものの位置が) 上の方であって、基準の面 (地面・海面・底面など) からのへだたりが大きい。② (ものの) 下端から上端までの長さが大きい。たけが長い。」(「学研」) のように、「～の～が～である。」の記述を見掛けることがある。これは「どのような属性主体」の「どのような属性」が「どのようなだ」という記述である。ここには、属性主体および属性の与える印象が語義分割に大きく影響を及ぼしていることを伺うことができる。又、「具体」「抽象」「人間」「音・声」「匂い」「時間」といった意味特徴によって語義を分けていることから、認知・認識の違いが語義分割に重要な位置を占めていることを伺うことができる。

(4) 属性主体の別が語義分割の際に大きな影響を持つことは先に指摘した。それでは、どのような違いが反映されているのであろうか。辞書等によれば (勿論、位置形容詞でのことであるが) 「具体的」か、「抽象的」か、つまり、「形の有るもの」か、「形の無いもの」か、それに、「人間に関するもの」か、の3つがあるようである。形の有るもの、形の無いものを更に厳密に言えば、視覚によって捉えられるもの、捉えられないものということができよう。辞書等で属性主体が〈有形〉、〈無形〉、〈有情〉によって分けられているということは、感覚における、視覚の優位性と、人間 (有情物) に対する感じ方の特異性を示しているように思われる。

このような意味特徴を各々、〈有形〉〈無形〉〈有情〉と呼び、それらの意味特徴をもつ属性主体を各々 [具象体] [抽象体] [ヒト] と表すことにしよう。

(5) 属性そのものの別はどのように捉えているのだろうか。これもこれまでの辞書等による分割記述からみておこう。

「音・声」「匂い」「空間」「時間」「関係」「精神活動」「能力」「価格」「精神活動」等を分けている点から、これらの属性を捉える器官の別が属性に対する意識の違いに大きく反映しているように思われる。「音、声」の分離は聴覚器官によって、「匂い」は嗅覚器官によって、「空間」は視覚器官によって行われているからである。各々の器官によって感じられる属性、意味特徴を [視覚属性] 〈視覚〉 [聴覚属性] 〈聴覚〉 [嗅覚属性] 〈嗅覚〉と呼ぶことにする。[視覚属性] [聴覚属性] [嗅覚属性] はその類似性 (五感としても纏められることが多いことから推測されよう。) により、[感知属性] としてまとめることもできよう。又、感知属性は意味特徴として、〈具体〉を、それ以外の属性は〈抽象〉を持つとしたい。感覚器官としては、この外、「味覚器官」「触覚器官」等が考えられるが今は挙げないことにする。あくまでも記述することを目的とする。

「関係」「価格」「能力」「程度」「数量」等は、直接的に感知されることのみでは認識されない。このことから異なった属性と意識されるのであろう。これらの属性を認識する器官を「判断器官 (仮名)」と仮に呼び、[判断属性] 〈判断〉ことにしたい。

[判断属性] は辞書等によると「程度」「量」「価値」「価格」等に分けられることが多い。それは、属性主体が固有に持つ属性といった印象をあたえているか否かによるものを思われる。つまり、「程度」や「量」は属性主体の固有の属性という印象を与えるのに対し、「価格」や「評価」は、人間の判断を前提にしているという印象を与えることからきていると思われる。前者は [分出属性] 〈分出〉を、後者は [付加属性] 〈付加〉を各々の属性、意味特徴として持つとしたい。

「意識」などの感情・精神活動は外界からの刺激ではなく、内からの物という点で意識のされかたが異なることは容易に想像できる。このような情意を感じる器官を「情意感受器官 (仮名)」と呼ぶことにし、それらは、[情意属性] 〈情意〉を持つとしたい。

人間の精神活動や情意の範疇に入らず、又〔感知属性〕とも言いがたいものに「時間」がある。時間は「音、声」「におい」「空間」とは異なり、属性主体を想定することが困難もあり、この点でも特殊である。ここでは、時間を一つの属性として、これを〔時間属性〕と呼び、そして意味特徴〈時間〉を持つとする。

この他、分割基準を考える上で必要な意味特徴〈固有〉〈集合〉〈関係〉、それに対応する属性として〔固有属性〕〔集合属性〕〔関係属性〕があるが、どのような位置を占めるのかは現時点では明らかではない。

(6) 以上のような考え方によって位置形容詞の概念的意味の分割基準を示しておこう。

「位置形容詞」の概念的意味に対する分割基準（意味特徴）の体系

〔Ⅰ〕属性主体(1) 〈有形〉〈無形〉〈人間〉 (←〈視覚〉)

〔Ⅱ〕属性 (2) (2-1) 〈感知〉・〈具体〉

(2-1-1) 〈視覚〉 (→〈有形〉〈無形〉)

(2-1-2) 〈聴覚〉

(2-1-3) 〈嗅覚〉

(2-2) 〈時間〉・〈抽象〉

(2-3) 〈判断〉

(2-3-1) 〈質・量〉

(2-3-1-1) 〈質〉

(2-3-1-2) 〈量〉

(2-3-2) 〈価値〉

(2-3-2-1) 〈評価〉

(2-3-2-2) 〈価格〉

(2-3-3) 〈関係〉?

(2-4) 〈情意〉・〈抽象〉

〔Ⅲ〕その他(3) 〈個有〉〈集合〉 (〈関係〉?)

(7) 前に示した基準によって区切られた語義の体系を示すと次のようになろう。

(「 」内はわかりやすさのための具体例である。)

〔Ⅰ〕属性主体の語義体系

(1)〈有形〉————— [具象体]

(2)〈無形〉————— [抽象体]

(3)〈人間〉————— [ヒト]

〔Ⅱ〕属性〔サマ〕の語義体系

(1)〈感知〉・〈具体〉 [感知属性]

〈視覚〉————— [視覚属性]

〈聴覚〉————— [聴覚属性]

〈嗅覚〉————— [嗅覚属性]

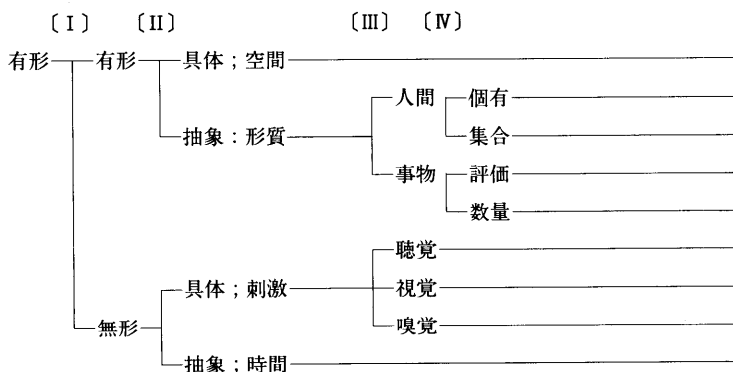
(2)〈時間〉・〈抽象〉—— [時間属性] —— [時間属性]

(3)〈判断〉〈抽象〉—— [判断属性]

〈質・量〉—— [分出属性]

〈質〉————— [質属性]

- (1)<+有情>—— 「能力、品位、地位、身分」
 - (3)<集合>—— 「地位、身分」
 - (3)<固有>—— 「能力、品位」
 - (1)<-有情>—— 「程度、勢い」
 - <数量>—— [数量属性]
 - <評価>—— [付加属性] ——
 - <価値>—— [価値属性]
 - <価格>—— [価格属性]
 - <関係>? —— [関係属性]
 - (1)<+有情>—— 「親疎、血縁」
 - (1)<-有情>—— 「関連、類似」
 - (4)<情意>・<抽象>—— [情意属性] —— [情意属性]
- (8) 位置形容詞における概念的意味分割の諸基準体系について鳥瞰しておこう。(実際の語義分割においては各語義によって出入りがある。)



(9) さらに細かな基準、例えば「形容」の小分類の基準については体系化は試みなかった。それは、他の形容詞の細かな、「形容」の小分類に匹敵する記述との比較総合を待たねばなるまい。

結果を見ると、荻野(1987)の名詞のシソーラス(1有意志体、2具象体、3活動、4抽象概念、5時、6場所)と類似点が多い。シソーラスとの関連については、他の形容詞、他品詞の調査を待って言及することにした。

V. 残された問題と今後の課題

本稿では、形容詞語彙の位置形容詞(『角川類語新辞典』に第一義「位置」としてある形容詞)を取り上げ、それらの語義分割基準を指摘した。残された形容詞についても今後調査分析したい。(形状形容詞については、丹保近刊aで触れた)又、他品詞についても見て行かねばなるまい。その時点において初めて、日本語に於ける語義の区切り方が大雑把であるが見えてくることを期待している。それはまた、日本人の語認識について、さらに語義の体系についても多くのことを語ってくれることにもなる。

注

- (1) ②は④③①に密接な関わりを持つものである。①多義語の認定(同音異義語)については、連続性をどのように処理するかが難しく、一朝一夕に解決のつかない課題を含む。又、④の多義語の意味構造に関する研究は、語義の区切り方についての考察を待って行う予定である。(③の語義配列については、1990a、1990cにおいて考え方の一部を示した。)⑤の多義語の機能についても詳細な考察が求められると思われるが、その為には、どのような語彙に多義性の高いものが見られるか、その理由は何から調査・考察する必要があると思われる。語義と多義性との関連については、丹保 1986a、1986b で一部触れた。⑤の多義語の機能、⑥の多義語の発生については、既に池上(1975) 国広(1982) 等がある。
- (2) 形状形容詞についての考察は丹保(近刊 a) を参照されたい。

1990. 10. 19

資料あるいは参考として用いた辞典等

- (1) “KENKYUSHA'S NEW JAPANESE-ENGLISH DICTIONARY” Katsumata, eds (1954)
- (2) 『外国人のための基本語用例辞典』文化庁(1971)
- (3) 『新明解国語辞典』(第二版) 金田一、他編(1974)
- (4) 『学研国語大辞典』金田一、池田 編(1978)
- (5) 『岩波国語辞典』(第三版) 西尾、岩淵、水谷、編(1979)
- (6) 『例解新国語辞典』林、野元、南 編(1984)
- (7) 『新潮現代国語辞典』山田、築島、白藤、奥田 編(1985)
- (8) 『現代国語例解辞典』林 編(1985)
- (9) 『国語基本用例辞典』林、金子、他編(1986)
- (10) 『日本語大辞典』梅棹、金田一、他監修(1989)
- (11) 『小学ことばのつかいかた辞典』林、金子他編(1984)
- (12) 『形容詞の意味用法の記述的研究』西尾 寅弥(1972) 国立国語研究所、
- (13) 『基礎日本語』1、2、3 森田 良行(1977、1980、1984)
- (14) 『分類語彙集』国立国語研究所(1964)
- (15) 『角川類語新辞典』大野、浜西 共著(1981)(改訂版『類語国語辞典』1986)
- (16) 『日本語教育のための基本語彙調査』国立国語研究所(1984)

引用文献及び参考文献

- (1) S. Ullmann (1962) 『言語と意味』(池上 嘉彦訳 1970.12) (1970. 6初版)
- (2) 奥田靖雄(1967) 「語彙的な意味のあり方」(『教育国語』8号)
- (3) 国広哲弥(1970) 「日本語次元形容詞の体系」(『言語の科学』2号)
- (4) 鈴木孝夫(1973) 『ことばと文化』
- (5) G. Leech (1974) “Semantics” (『現代意味論』安藤監訳1977)
- (6) E. A. Nida (1975) 『意味の構造—成分分析—』(升川 潔訳 1977. 4)
- (7) 池上嘉彦(1975) 「多義語の構造」(『意味論』)
- (8) 池上嘉彦(1977) 「意味の体系と分析」(『岩波講座日本語9 語彙と意味』)
- (9) 国広哲弥(1982) 『意味論の方法』97~142p (第3章 多義と同音意義)
- (10) 荻野綱夫(1983) 「I、シソーラスについて」(『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究—5』 pp 4~61)
- (11) 森田良行(1983) 「辞書の意味記述—その研究面と応用面—」(『日本語学』1983年月号)
- (12) 前田富祺(1984) 「語義変化と意味関係」(『国語語彙史の研究』五)

- (13) 平沢洋一 (1985) 『意味の世界と日本語』
- (14) 中野 洋 (1985) 「語義記述の問題点」(『朝倉日本語新講座 文法と意味Ⅱ』)
- (15) 国広哲弥 (1986) 「類語研究の問題点—多義語を中心に—」(『日本語学』1986. 9)
- (16) 荻野綱夫 (1987) 「日本語の意味分類体系」(『計量国語学』16巻3号)
- (17) 村田 年 (1987) 「単語の意味と辞書の記述」(研究会発表資料)
- (18) 丹保健一 (1986a) 「多義語の語彙特徴についての小見——副詞を中心に——」
(『文芸研究』第111集)
- (19) 丹保健一 (1986b) 「辞書間に見られる多義記述の相違について——音象徴語を中心に——」(『国語
語彙史の研究七』)
- (20) 丹保健一 (1990a) 「多義語における語義配列について——形容詞語彙(性状)をめぐって——」
(『三重大学教育学部研究紀要第41巻(人文・社会科学)』)
- (21) 丹保健一 (1990c) 「五感語彙の多義性—多義の意味的広がりをめぐる—」(『金沢大学語学・文学
研究』第19号)
- (22) 丹保健一 (近刊 a) 「形状形容詞における語義の区切り方をめぐって—」(『国語学研究』30号)
- (23) 丹保健一 (近刊 b) 「多義語における中心的語義と周辺の語義」(『文芸研究』第126集)